

コレクション展

日本画 こと はじめ

Museum Collection:
Reconsidering
of Japanese-Style
Paintings

鑑賞ガイド

西宮市大谷記念美術館
OTANI MEMORIAL ART MUSEUM, NISHINOMIYA CITY



西宮市大谷記念美術館について

西宮市大谷記念美術館は西宮市が実業家の大谷竹次郎おおたに たけじろう氏から、美術品・土地・建物の寄贈きぞうを受け、

そのコレクションを広く一般に公開するために1972年11月3日に開館した美術館です。

日本近代洋画、近代日本画、フランス近代絵画を中心とした当初のコレクションに加えて、開館してから約50年間で、

阪神間を中心とする地元作家の作品や版画なども積極的に集め、現在では1300点以上の作品しゅうぞうを収蔵しています。

日本の近代美術史に関わる展覧会てんらんかいをはじめとして、絵本原画、デザイン、現代美術など、

さまざまなジャンルの展覧会てんらんかい かいさいを開催しています。



美術館での約束 — 作品を鑑賞かんしょうする時は、次の約束を守って下さい。 —



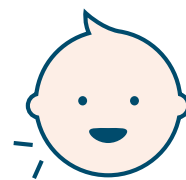
作品をさわらない

作品はとても大切なものです。壊こわしたり汚よごしたりしないように、さわらないで下さい。



ゆっくり歩こう

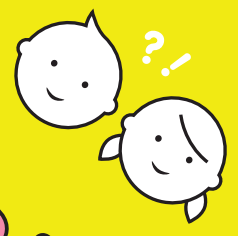
館内で走ると、作品や人とぶつかってケガをしたり、作品を壊こわしてしまう危険きけんがあります。



小さな声で話そう

静かに集中して作品を見たい人もいます。展示室のなかで作品について話す時は、小さな声で話して下さい。

「作品を鑑賞するにあたって」



作品に描かれている場所はどこ？

季節はいつ？ 描かれた人は何を考えている？

絵の中の出来事を想像しながら見てみましょう。

様々な発見があるはずですよ。この展覧会では、様々な日本画を展示しています。

自分なりの見方で、ぜひお気に入りの1点を見つけて下さい。

1 横山大観《若葉》1914年



様々な色の葉をつけた樹々が描かれています。それぞれの葉の描き方や、色づかいには、どんな工夫がされているのでしょうか？

また、今の自分と未来の自分では作品に対して感じるものが異なっているかもしれません。今の自分の気持ちを忘れないためにも、感想を記録してみませんか。

作品をじっくり鑑賞した後は、どの作品が一番印象に残ったのか書いてみましょう。その作品のどのような部分が特に心に響いたのか、理由も書いてみましょう。

描かれているものや色など、絵を見る時にどこに注目するかは人によって様々です。そして、同じ絵を見ても感じ方は人それぞれ。一緒に鑑賞した人同士、作品について話し合ってみることは、自分だけでは気づかなかった作品の魅力に気づくことにつながります。

作品をじっくり鑑賞した

2 鈴木松年《春溪閑棹図》1914年



満開の桜のなかでの川下り。船に乗った人の気持ちになって、その様子を想像してみましょう。

作品名：

作者：

心に響いた理由：

3 北野恒富《春餘》1929-30年



桜の花の髪飾りをつけ、鮮やかな水色の着物で着飾った女性が描かれています。女性は何をみて、どんなことを考えているのでしょうか？



こんな風に作品を見ると、色々な発見があるかも。

ごあいさつ

当館では、設立のきっかけとなった大谷竹次郎氏の旧蔵品を中心に、現在約150点の日本画を収蔵しています。「日本画」とは、主に岩絵具（鉱物や岩石を砕いて粉にし、絵具にしたもの。）や膠（動物の骨や皮を溶かしたもの。絵具を紙や布に接着するために使います。）を原材料に用いた絵画の呼び名です。この言葉は明治時代以降、それまでの技法で描かれた絵画を、西洋の技法で描かれた「洋画」と区別するために用いられ始めました。

明治時代に日本が新しく国として改革し近代化していくなかで、「美術」や「絵画」のさまざまな制度も形成されていきました。「日本画」についても多くの議論がなされ、明治20（1887）年代に美術用語として定着します。そうした時代の流れの中で、時に古典作品や西洋の技法に学び、仲間同士で励まし合ったり競い合ったりした画家たちによってさまざまなスタイルの作品が生み出され、「日本画」は独自の道を歩み始めます。

当館所蔵の日本画の多くは、大正時代から戦前にかけて制作された作品で、作者も描かれている題材も多種多様です。しかし、これらの作品が描かれた時代背景や作家達の関係性といった観点で見ると、共通している事柄や深い関わりが浮かび上がってきます。

本展では、画家同士の関係性や、当時好まれた画題などのテーマごとに当館のコレクションをご覧ください。当館所蔵の日本画コレクションの新たな魅力を発見するきっかけとなれば幸いです。

第一章 蔵出し 大谷コレクション

まずは「日本画」という言葉が生まれる前の江戸時代に、どのような作品が制作されたのかを見ていただきます。

当館では江戸時代に制作された作品を数点所蔵しています。平成29（2017）年に当館で展覧会を開催した西宮の狩野派・勝部如春齋や、幕末から明治にかけて活躍した田能村直入らの作品を展示します。

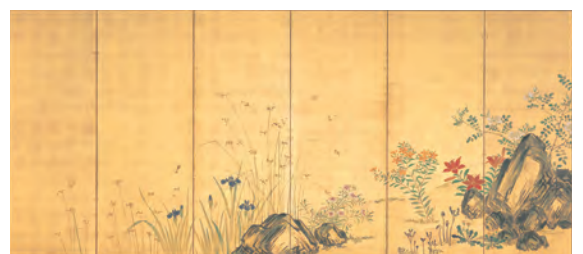
コレクションのなかには、昭和47（1972）年の開館以降ほとんど展示されていない一風変わった作品もあります。本章では、そうした作品も紹介します。



4 歌川豊清《隅田川舟遊図》江戸時代



5 渡辺南岳《二美人図》江戸時代



6 勝部如春齋《四季草花図》18世紀後半

「描かれたものをよく見てみよう」

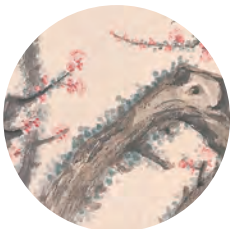
《歳寒三友図》と《蓬莱山図》には、
私たちに身近な植物が描かれています。
どのような植物が描かれているか、よく見てみましょう。



7 田能村直入《歳寒三友図》1860年



8 狩野晴真《蓬莱山図》1846-62年



上から松、竹、梅(拡大)

《蓬莱山図》には植物の他に、鶴と亀も描かれています。蓬莱山は、昔の中国で考えられた伝説の理想郷のこと。仙人が住み、不老不死の薬があると信じられてきました。この蓬莱山は、巨大な亀が背負っているという言い伝えがあります。「鶴は千年、亀は万年」というように、どちらも長寿の象徴として、松竹梅と同様に好まれてきました。

他の植物と違い、厳しい冬の寒さの中でも緑の葉を茂らせ変わらない姿を保つ松と竹、寒さに負けずに花を咲かせる梅の姿は、昔の中国では高潔(気高く、けがれない立派な様子)であるとされ、どんな時でも己をしっかり保つ理想的な人物の象徴として扱われるようになりました。その考え方がやがて日本にも伝わりました。また、松竹梅は冬でもたくましく成長することから、強い生命力を感じさせ、繁栄や長寿を表す縁起の良い植物としても、人々に親しまれました。

昔の人は、植物や動物を描く時に、そこに様々な意味を込めることがありました。《歳寒三友図》と《蓬莱山図》に描かれた松竹梅もその一つ。



上から松、竹、梅(拡大)



左から亀、鶴(拡大)



第二章 日本画を描く人々

明治時代より前、絵を学ぶためには既に名が通った絵師の元に弟子入りすることが一般的でした。明治13(1880)年に京都府画学校が、明治20(1887)年には東京美術学校が開校すると、絵を学ぶためにこれらの学校に入学することが主流となっていきます。それぞれの学校では、江戸時代から



9



10



11

続く流派の流れをくむ教師陣による指導のもと、多くの画家が育ちました。

また卒業後も志を共にする画家が集結し、制作に励みました。やがて各々の「日本画」に対する様々な考え方が生まれ、その主張による対立が生まれると、そこから日本美術院をはじめ多くの団体が生まれることとなります。

本章では、画家たちの関係性に注目し、作品が描かれた背景に迫ります。

- 9 橋本雅邦《夏流牧童図》1892年頃
- 10 菱田春草《秋林遊鹿》1909年
- 11 西村五雲《冬暖》1934年

第三章 好まれた画題

日本画には、日本や中国の素晴らしい景色や理想の景色といった「風景」、歴史上の偉人や美しい装いの女性といった「人物」など、様々な画題(絵画の主題)の作品があります。江戸時代には一般的であった物語や、めでたい意味を持つ題材などは、明治時代以降、その意味するところはより簡潔で直接的なものへと変わっていきました。昭和に入ると他国との対立が深まり戦争の足音が近づいてくると、国民の心を一つにするための考え方や運動が活発になります。

そのため、富士山や桜などのいわゆる「日本」を象徴するとされる画題の絵が好まれるようになりました。

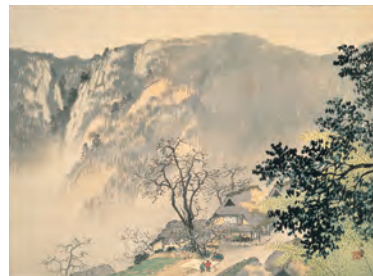
本章では画題に沿って、「歴史・説話」では福田眉仙や山元春挙、「美人画」では上村松園、伊東深水、寺島紫明、「『日本』らしい画題」では横山大観、堂本印象らの作品を展示します。



12



13



14



15

- 12 山元春挙《黄初平図》1891年
- 15 横山大観《大和心》1941年頃

- 13 上村松園《清韻》1943年

- 14 川合玉堂《山村早春》1943年頃

第四章 新たな表現の追求

大正時代には西洋の様々な新しい表現技法に影響を受けた画家が現れました。昭和にかけて、日本画の表現の幅は更に広がりを見せます。

京都市立絵画専門学校で日本画を学んだ山下摩起は、卒業後に油彩画を研究し、留学したフランスでフォーヴィスムやキュビズムという新しい絵画運動に強い影響を受けまし

た。帰国後は再び日本画を制作し、西洋で学んだ表現を積極的に取り入れた作品を発表します。

本章では「新たな表現の追求」と題し、山下摩起の他、主題の簡略化により装飾的な作風を築いた福田平八郎、紙粘土を用いた独自の造形感覚で作品を制作した下村良之介らの作品を紹介します。



16



17



18

- 16 山下摩起《雪》1933年
- 17 福田平八郎《竹》1950年頃
- 18 下村良之介《水辺屏風》1972年



「どのように制作されたか考えてみましょう」

この章では、表面がザラザラしていたり、でこぼこと盛り上がった部分がある作品が展示されています。作者はどのような画材を使って、どんな風にこの作品を制作したのか想像してみましょう。



19 下村良之介《沙》1974年

絵を鑑賞する時に、何が描かれているのか、だけでなく何を使ってどんな風に制作されたのか、という点を意識することで見えてくる魅力もあります。

作者の下村良之介は「絵とは自分にもっともぴったりした材料で、自分を表現すればよいもの」と述べています。下村はこれまでのルールにしがらみなく、自由な発想で制作に取り組み、独自の技法を極めました。

この作品は、最初にベニヤ板のパネルの上に紙粘土を置き、そこに絵具をのせた上から薄い紙をかぶせ、手でつまんだりしながら成形されました。そうすることによって、凹凸のある画面が出来上がりました。作品からは筆で描いた時には出せない、質感の面白さが感じられます。

作品リスト

作家名	作品名	制作年	サイズ(縦×横cm)	技法・材質	図版掲載	
1 第一章 蔵出し 大谷コレクション						
1	勝部如春斎	四季草花図	1764-1784	各169.4×369.0	紙本金地着色・六曲一双向面屏風	6
2	狩野晴真	蓬萊山図	1846-62	126.0×175.0	絹本着色・軸装	8
3	田能村直入	歳寒三友図	1860	157.2×97.5	絹本着色・軸装	7
4	渡辺南岳	二美人図	江戸時代	115.0×50.5	絹本着色・軸装	5
5	歌川豊清	隅田川舟遊図	江戸時代	47.8×68.7	絹本着色・軸装	4
6	作者不詳	源平合戦	制作年不詳	各59.0×34.3	紙本着色・六曲一双向屏風	
7	作者不詳	源平合戦	制作年不詳	各132.0×54.0	紙本着色・六曲一双向屏風	
2 第二章 日本画を描く人々						
1	横山大観	若葉	1914	188.8×65.3	絹本着色・軸装	1
2	菱田春草	秋林遊鹿	1909	115.5×50.3	絹本着色・軸装	10
3	橋本雅邦	夏流牧童図	1892頃	108.0×54.4	絹本墨画淡彩・軸装	9
4	川合玉堂	幽瀑	1916	110.0×41.5	絹本着色・軸装	
5	川合玉堂	蓬萊銀色	制作年不詳	172.0×71.4	絹本墨画淡彩・軸装	
6	川合玉堂	奔湍	1945頃	69.0×72.6	絹本着色・軸装	
7	児玉希望	泉声鳥語	1932頃	66.4×72.3	絹本着色・軸装	
8	鈴木松年	春溪閑棹図	1914	155.0×72.1	絹本着色・軸装	2
9	上村松園	秋の粧	1936	162.7×57.6	絹本着色・軸装	10
10	山元春拳	雪溪遊鹿図	1926頃	161.0×92.4	紙本着色・軸装	
11	山元春拳	溪山密雪図	1922頃	182.5×100.5	絹本着色・軸装	
12	竹内栖鳳	江南雨来	制作年不詳	39.2×47.7	紙本墨画・軸装	
13	橋本関雪	田家晩秋	制作年不詳	49.1×56.5	絹本着色・軸装	
14	西村五雲	冬暖	1934	68.1×85.8	絹本着色・軸装	11
15	徳岡神泉	鯉	1950頃	45.0×56.5	紙本着色・軸装	
16	小林古徑	うそ	制作年不詳	46.2×58.5	紙本着色・軸装	
17	奥村土牛	初夏	1956	91.0×57.9	紙本着色・軸装	
18	榊原紫峰	桃小禽	1920頃	44.0×50.0	絹本着色・軸装	
19	村上華岳	柳橋	1935頃	63.0×33.3	紙本墨画・軸装	
20	入江波光	雨中耕牛	1937	44.6×60.3	紙本墨画淡彩・軸装	
21	石川晴彦	母の像	1922	35.0×28.8	絹本着色・額装	
3 第三章 好まれた画題						
1	福田眉仙	梅下寿老図 雪舟等楊作の模写	1921	124.0×58.4	絹本着色・軸装	
2	山元春拳	黄初平図	1891	167.0×80.7	絹本着色・軸装	12
3	木鳥櫻谷	新鷗	制作年不詳	140.0×50.3	絹本着色・軸装	
4	福田眉仙	漁村秋風図	制作年不詳	127.1×42.7	紙本墨画淡彩・軸装	
5	川合玉堂	山村早春	1943頃	53.8×73.2	絹本着色・軸装	14
6	川合玉堂	高原深秋	1948頃	55.1×72.3	絹本着色・軸装	
7	横山大観	大和心	1941頃	130.0×104.0	紙本着色・額装	15
8	横山大観	桜に不二	制作年不詳	50.0×58.0	絹本着色・額装	
9	堂本印象	朝日清暉	制作年不詳	63.6×71.7	絹本着色・軸装	
10	上村松園	清韻	1943	67.6×72.1	絹本着色・軸装	13
11	上村松園	蛭	1943	72.5×86.5	絹本着色・軸装	
12	伊東深水	吹雪	1947頃	119.0×36.6	絹本着色・軸装	
13	伊東深水	菊	1960頃	59.6×55.8	紙本着色・額装	
14	北野恒富	春餘	1929-30	125.2×50.8	絹本着色・額装	
15	島成園	弥生	制作年不詳	43.3×50.7	絹本着色・軸装	
16	星野更園	美人図	制作年不詳	129.1×41.5	絹本着色・軸装	
17	寺島紫明	夕月	1916	143.0×71.2	絹本着色・額装	
18	寺島紫明	振袖	1933	128.0×41.5	絹本着色・額装	
19	寺島紫明	冬霧	1941	97.5×58.6	絹本着色・額装	
4 第四章 新たな表現の追求						
1	山下摩起	大威徳明王	1966	225.0×195.0	紙本墨画・軸装	
2	山下摩起	雪	1933	各171.6×377.8	紙本着色・六曲一双向屏風	16
3	山下摩起	女三態之図	1936頃	158.0×237.0	麻本着色・額装	
4	山下摩起	さざんか	制作年不詳	133.5×60.5	紙本着色・軸装	
5	山下摩起	草花図	1950以降	各 121.5×60.5	紙本着色・二曲一隻屏風	
6	福田平八郎	竹	1950頃	38.3×56.0	紙本着色・軸装	17
7	福田平八郎	紅葉	1950頃	42.6×57.9	紙本着色・軸装	
8	杉山寧	雉山百合図	1953	55.7×87.4	紙本着色・額装	
9	杉山寧	鴨	1955	85.1×60.5	紙本着色・額装	
10	山口蓬春	瓶花	1958	66.4×47.4	紙本着色・額装	
11	小倉遊亀	赤絵鉢	制作年不詳	37.9×49.0	紙本着色・額装	
12	下村良之介	沙	1974	119.0×120.7	紙本着色・額装	19
13	下村良之介	水辺屏風	1972	68.8×184.0	紙本着色・二曲一隻屏風	18
14	下村良之介	月明を翔く 庇	1988	120.0×243.0	紙本着色・額装	

◆3-15は個人蔵、3-17、18は大関株式会社蔵。その他はすべて西宮市大谷記念美術館蔵。 ◆作品番号は展示の順序と必ずしも一致しない。 ◆表紙図版：西村五雲《冬暖》(部分)